

漢字とソグド系文字

吉池孝一

—

漢字は、紀元前 1300 年頃の甲骨文字より現代の簡体字に至るまで、三千数百年にわたり、東アジアの文化を支える柱であった。その周辺には文字を持たない民族や、すでに文字を持った民族がいた。諸民族は柱たる漢字に近づき、その漢字との接触の過程で、漢字に由来する文字や漢字と関連のある文字を使用するようになった。また、すでに文字を使用していた民族であっても、漢字より何らかの影響を受けたものがある。さらには、逆に漢字に何らかの影響を与えたものもある。そこで、本稿では、漢字の周辺にあって、漢字と何らかの関連を持つ文字のうち、ソグド系文字を取りあげ、漢字との間で互いにどのような影響を与え合ったかにつき確認を試みようとおもう(図1参照)¹。



図1. 東アジアの主要文字

その際、字形だけでなく、「文字組織」全体からみでの影響の有無を問題とする。文字組織とは、もちろん①文字を組み立てる要素とそれによって作られた文字から成って

¹ 本図は西田龍雄 1987 を参照し新たに作成したものである。

いるわけであるが、それだけでなく②文字要素を組み合わせて文字を作る方法、③文字を互いに区別する方法と同類にまとめる方法、④表意と表音の方法、⑤縦書き・横書き・分ち書きなどの文字配列法をも含めたものであり、それらが緩やかなまとまりを成している。

なお、「文字の系統」という場合、文字組織の諸点のうち、①文字を組み立てる要素と文字すなわち「字形」の歴史的継承関係の有無に拠るのがふつうであり、それが適当であるかどうか検討の余地はあるが、本稿もそれにしたがうことにする。

二

さて、ソグド文字はソグド語を記した文字であり、もとはアケメネス朝ペルシアの公用語であったアラム語を記したアラム文字に発する。西方よりアジアの北部へと持ち込まれ、ウイグル文字（9～14世紀）、モンゴル文字（13世紀～今に至る）、満洲文字（17～20世紀）と改良されながら伝わり、現在の中国新疆ウイグル自治区の錫伯(沐)族の錫伯文字や中国内蒙古自治区のモンゴル文字となった。これらの文字をソグド系文字と称する。単音を表わす表音文字で、1字が意味を担うことはない。初期のものを除き、ふつうには英語の綴りのように単語などは連書され、意味の切れ目に対応した分ち書きがある。言うまでもないことであるが漢字とは文字の系統を異にする。

さて、ソグド文字の前身であるアラム文字は右から左に横書きされたようである。ソグド文字も同様であったとされるが、図2のように6世紀末の碑文には漢字と同様に縦書きされたものがある。

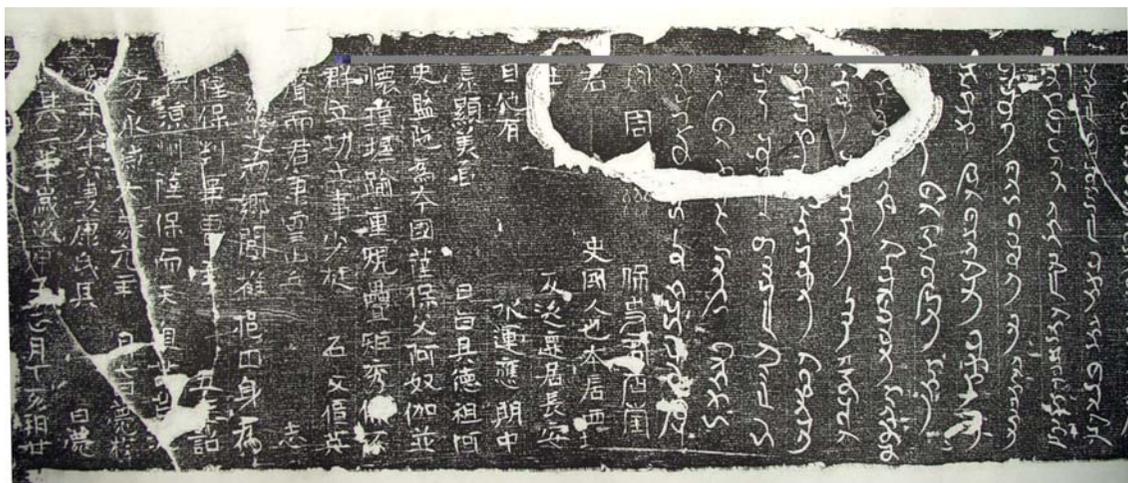


図2. 北周・大象二年（580年）史君墓誌拓本（古代文字資料館蔵）

碑文の中央より左側が漢字漢文であり縦に右から左に向かって書かれ、碑文の中央よ

り右側がソグド文字ソグド語であり縦に左から右に向かって書かれている²。やや時代が下った 7 世紀前半になるとソグド文字の書記方向について興味深い記述が現れる。それは玄奘の『大唐西域記』であり、そこにはソグド文字は縦に書かれると明記されている。

素葉城から羯霜那国に至るまで、土地は窣利(ソグド)と名づけ、人も[窣利人と]いう。文字・言語もその名称に随って[窣利文字・窣利語と]称している。字のなりたちは簡略で、もと二十余文字であるが、それが組み合わさって[語彙が]でき、その方法が次第にひろがって[文を記して]いる。ほぼ記録があり、その文を豎(たて)に読んでいる。そのやり方を順次に伝授して、師匠も弟子もかえることがない。(『大唐西域記』卷第一)³

現在においてもソグド文字の文書は数多く残されているが、文書類は縦にも横にも動かすことが可能であるため縦書きであったか横書きであったかを判断するのは困難である。したがって、玄奘のこの証言は極めて貴重である。この証言によるならば、玄奘が訪れた 7 世紀前半の西トルキスタンでは縦に書かれたということになる。なぜ縦書きが現れたか定説はないようであるが、これを漢字漢文の影響とする見方もある⁴。その適否は後の課題として、縦書きとなったことにより漢字漢文との併記が容易になったことは確かである。

三

ウイグル文字 (9~14 世紀) になると、初期のものを除き大部分は縦書きされるという⁵。縦書きであるのは、7 世紀前半以降の西トルキスタン以来のソグド文字の習慣によったものと考えてよいのであろう。次のモンゴル文字 (13 世紀~今に至る) はウイグル文字をやや改良したものであり、すべて縦に左から右に向かって書く。漢字漢文は縦に右から左に向かって書くから、両者の書記の方向は逆となる。このような書記の方向はそれぞれの文字組織に属す特徴である。

さて、元代の漢字漢文には、驚くべきことに、縦に左から右に向かって書くものが複

² 同様に縦書きされた資料として、吉田 豊 2003 (「ソグド文字とソグド語」『NHK スペシャル文明の道 ③海と陸のシルクロード』東京：日本放送出版協会,90-99 頁) にモンゴリアで発見されたブグト碑文が紹介されている。

³ 水谷真成訳注 1999 (『大唐西域記 1』東京：平凡社) の訳 (57-58 頁) による。水谷氏の注には「ソグド文字はシリアのアラム文字を基にした文字であり、このソグド文字からウイグル文字が案出された。通常横書きされるが、玄奘のいう「その文を豎読みする」書き方もあった。」(59-60 頁) とある。注は「書き方もあった」と慎重な表現をとる。なお、『大唐西域記古本三種』(北京：中華書局影印、1981 年) の敦煌本残巻によると「自素葉水城至羯霜那國、地名窣利、人亦謂焉。文字語言、即隨稱矣。字源簡略、本二十餘言。轉而相生、其流浸廣。粗有書記、豎讀其文。遞相傳授、師資无替。」とある。

⁴ 庄垣内正弘 2001 (「ウイグル文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著,三省堂,2001 年,118-121 頁) 参照。

⁵ 注 4 の庄垣内正弘 2001 を参照。

数ある。これまでに気づいたものを挙げると次のようである。

一つは、『蒙古字韻』（校訂者である朱宗文の序年は1308年）という書。これは漢字の音形を表音文字のパスパ文字で綴り漢字と対照させたもので、韻書のような体裁となっているが、漢字とパスパ文字の対照表とも言うべきものである⁶。写本が天下の孤本として大英図書館に所蔵されているが、清代後期までは元刊本があったようである。巻頭に劉更と朱宗文という人物による漢字漢文の序が付されており、その二つの漢文は縦に左から右に向かって書かれている。おそらく元刊本でもそのようであったと考えて大過ないであろう。

いま一つは「特贈鄭鼎制誥」と称される皇慶元年（1312）の皇帝聖旨を刻した碑文である⁷。この碑文は上截と下截に別れる。上截にはパスパ文字で漢語を記した聖旨があり、縦に左から右に書かれている。下截は同一内要の漢字漢文であり、上截と同様に縦に左から右に書かれている。

これらは、パスパ文字の書記方向を通して、間接的にウイグル文字やモンゴル文字の書記方向を受け入れたためである。間接的に受け入れたとは次のようなことである。すなわち、モンゴル人は元（1271～1368年）建国の直前の1269年に、パスパ文字を公布しモンゴル語を表記するようになったわけであるが、それよりも以前よりウイグル文字に発するモンゴル文字で自分達の言葉を書いていた。パスパ文字作製後は文字をパスパ文字に置き換えて文章を書き記したため、その結果として、ウイグル文字やモンゴル文字より「縦に左から右に向かって書く」という書記の方向を受け継ぐことになったというわけである。上では規範的でない書記方向の漢字漢文として2種を紹介したわけであるが、あるいは、元というモンゴルの時代は、書記方向に関する規範意識が緩んだ時代であり、このような漢字漢文もそれほど特殊なものではなかった、ということかもしれない。

現代に目を転じて、しばしば縦に左から右に書かれた文を目にする。例えば『八思巴字蒙古語文獻彙編』（内蒙古教育出版社、2004年）では、漢字漢文の一部が縦に左から右に書かれている。この書には、縦に左から右に書かれるモンゴル文字とパスパ文字が含まれるため、漢字漢文もそれに倣ったのである。もちろん、これは規範的な漢字漢文ではない。しかしながら、字形だけでなく文字組織全体から見た場合、漢字は周辺の文

⁶ この指摘は、中村雅之 1993 に『蒙古字韻』は一東から十五麻にいたる 15 の韻部に分類されており、それまでの伝統的な韻書と大きく異なっている。これは『蒙古字韻』の目的が押韻の規範を示すためというより、当時の国字であるパスパ字の綴りを知らしめることにあったからなのではないかと推測される。」（22頁）とある。

⁷ 羅常培・蔡美彪 2004 の 44 頁参照。

字に影響を与えるだけでなく、影響を蒙ることがあることを示す例として興味深い。

なお、モンゴル文字には篆書体もあり、これも漢字の篆書体に学んだものである。

四

満洲文字（17～20 世紀）には、無圏点(ムケンテン)満洲文字と有圏点(ウケンテン)満洲文字の 2 種がある。無圏点満洲文字はモンゴル文字を大体そのまま使って満洲語を表記した初期の文字である。いっぽう有圏点満洲文字は、天聰六年（1632）に皇帝より文字改革の命をうけた達海(ダハイ)が、従来の文字に丸印（圏という）や点を加えるとともに、新たに幾つかの文字を作って満洲語を表記したものである。その満洲文字で記された資料は膨大な量にのぼるが、およそ 2 種に大別することができる。ひとつは満洲語資料。今ひとつは他言語を記した資料である。後者の中心は何といても漢語である。漢語の横に振り仮名のように満洲文字を付したものと、満洲文字のみにより漢語を記したものがある⁸。この満洲文字のみにより漢語を書き記したものは、1 音節毎に分ち書きされ、単語など意味の切れ目に対応する分ち書きはない。ソグド系文字組織の表記法から逸脱したとも言い得るこのような音節毎の分ち書きの出現は、言うまでも無く漢字漢語を表記したことによるものであり、漢字の影響といえよう。その他、満洲文字には篆書体がある⁹。これも漢字の篆書体に学んだものである。

五

ソグド系文字と漢字は文字使用の長い伝統を持つ。両者とも牢固な文字組織のように見えるけれども、字形だけでなく文字組織全体の上から見たならば、あちらこちらに接触によって生じた痕跡をみてとることができる。接触の痕跡（あるいは痕跡らしきもの）は上に挙げたものに限らないであろうが、それは今後の課題として、今回はとりあえず気が付いた点を書きとめてみた。

参考文献

- 羅常培・蔡美彪 2004. 『八思巴字與元代漢語 增訂本』, 北京: 中国社会科学出版社. 初版は 1959 年。
汪玉明 1993, 1996. 「満文篆字研究(上)(下)」, 『中国民族古文字研究(第二輯)(第三輯)』, 天津: 天津古籍出版社, pp.288-290(上)、pp.43-63(下)。

⁸ 吉池孝一 1998 (「満洲文字音写「法華経普門品」(東洋文庫所蔵写本)について」, 『東洋哲学研究所紀要』第 14 号, (61)-(78)頁) 参照。

⁹ 汪玉明 1993, 1996 (「満文篆字研究(上)(下)」, 『中国民族古文字研究(第二輯)(第三輯)』天津古籍出版社, 288-290 頁(上)、43-63(下)頁) 参照。

- 言語編集部 2007.『月刊言語 特集：東アジアの文字文化』,東京：大修館,2007年10月号.
- 庄垣内正弘 2001.「ウイグル文字」,『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著),東京：三省堂,pp.118-121.
- 中村雅之 1993.「『蒙古字韻』と『五音集韻』」,『中国語学』240号,pp.21-30.
- 西田龍雄 1987.「東アジア主要文字分布図」,『書道研究 特集：漢字周辺文字の研究』(美術新聞社)1987:9の巻頭地図.
- 水谷真成訳注 1999.『大唐西域記1』,東京：平凡社.
- 吉池孝一 1998.「満洲文字音写「法華経普門品」(東洋文庫所蔵写本)について」,『東洋哲学研究所紀要』第14号,pp.(61)-(78).
- 吉池孝一 2007.「漢字関連文字の諸相」,『佐藤進教授還暦記念 中国語学論集』,東京：好文出版,pp.154-163.
- 吉田 豊 2003.「ソグド文字とソグド語」,『NHK スペシャル文明の道 ③海と陸のシルクロード』,東京：日本放送出版協会,pp.90-99.